

中川根ふる里通信

= 第 7 号 =

編集・発行・〒7・ラフ中川根
 連絡先 〒428-03
 静岡県榛原郡中川根町上長尾
 中川根町役場総務課 790
 ふる里通信課
 TEL・05475(6)1111
 郵便振替口座(名古屋)7-81356



十月も中旬ありちて氏神様のお祭りが
 おこなわれる頃 秋芽の美しい茶園の中
 真白い空間のようには蕎麦の花が咲いて、
 やがて霜の降るころ実が取り入れられ
 冬の日には暖かな大根そばとなるでしう。

米が日本人の生活を支え、稲作が日本文化生成の基盤に
 なったことはまぎれもない事実である。しかし一方、焼畑
 農業が山に住む人々の生活を力強く支え、そこに独自の文
 化を育んできたのも事実である。

大井川の中上流域は、いわば焼畑文化圏で、昭和に入っ
 てからも焼畑が盛んに行われていた。大井川が閉塞谷河
 川である点、また江戸時代に架橋通船が禁止されていた
 点から、この地域ではとりわけ、自給自足的な傾向が強まっ
 ていた。それは焼畑農業を盛んにし、焼畑文化を生成、残
 存させることにもつながったのである。

焼畑のことを大井川中上流域では「山づくり」「やぶ焼
 き」などと呼ぶ。「山づくり」には次の三つのやり方で代表
 される。

- ・やぶ伐り。山の雑木を伐って焼畑にする。これが古代
 以来の焼畑の基本形式である。やぶ伐り方式はかつて中
 上流域全帯に行われていたが、植村節の拡大によって、次
 茅に減少し、最後は井川地区のみに残った。やぶ伐り方
 式の場合、一年目を「アラク」と呼び、二年目を「カウシ
 と呼んで山豆と、三年目を「クナ」と呼んで粟やキビを四年
 目を「イモデ」と呼んで里芋を作る形が多かった。
- ・杉あと。杉の植林を伐採した跡地を山地主から借りて
 焼畑にする方法で、借り手にとっては食糧確保、地主にとっ
 ては再植した杉の下刈り手間の省略になり、互いに好都合
 であった。やぶ伐りが古代から引き継がれて来た焼畑
 なら「杉あと」は「近代の焼畑」である。方式は、一年目に
 稗や粟、二年目に豆類、三年目に芋類を作っておりは杉山
 にもといた。
- ・そばやぶ。雑木山を茶畑にする前の一年を焼畑にして
 ソバを作ることで「夏やぶ」と称し、盆に木を伐り土
 用明けのヒトナヌカに火を入れた。

そばやぶ以外は「秋やぶ」と呼び、秋また葉があるころ
 やぶ伐りをして枯らしておいて三月彼岸すぎに火入れを
 した。畑一間ほどの火道を開き、斜面の上部から火をかける。
 火は危険なのですべて近隣の人々との共同作業で
 行われた。

野本寛一さん著 大井川、その風土と文化
 より

その7 母校は今 下泉小学校



母校の思い出

勝山国男

秋も深まりゆく十月のはじめ、元下泉小学校（現川根サンダル工業）の跡の、今も残されている正面階段に立って、ここを卒業した多くの人の足跡に思いを馳せながら、一望できる下泉の全景を眺めて、時の流れの早さと、移り変わる姿に感慨ひとしおなものがあふれ、しばし、忘却の彼方にある思い出の糸をたぐってみた。

母校、下泉小学校は、明治五年、当時の寺跡（東泉寺）に設立され、以後、九十四年間、下長尾小学校（現南部小学校）と統合するまで、下泉区民の心のよりどころとして、母なる大地として存在してきた。

下泉の歴史とともに歩いてきた校舎も、一部昔の面影を残すだけとなり、統合、二十二年の歳月の流れを感じさせる。当時、学校のシンボルであった、大きな五葉松や、校庭の片隅にあった、せんだんの高木も今はなく、僅かに、一隅の台地にある碑（岩本先生、河野先生）が、当時を偲ぶ唯一のものとなってしまった。

私が、小学校に入った頃は、旧校舎で、平屋建てであり、正面に職員室、左側に三教室と器具室、便所があり、右側に裁縫室が、あって、その横の池の端に、職員住宅、炊事場がある、こじんまりとした建物であった。校庭も狭く、現在、立派な校舎、校庭で学んでいる、ことも違には想像もできないものであった。

児童数も少なく、複式学級だった関係もあって、上下のつながりも強く、兄弟のようにして教え合い、遊んだ思い出が、今も強く残っている。

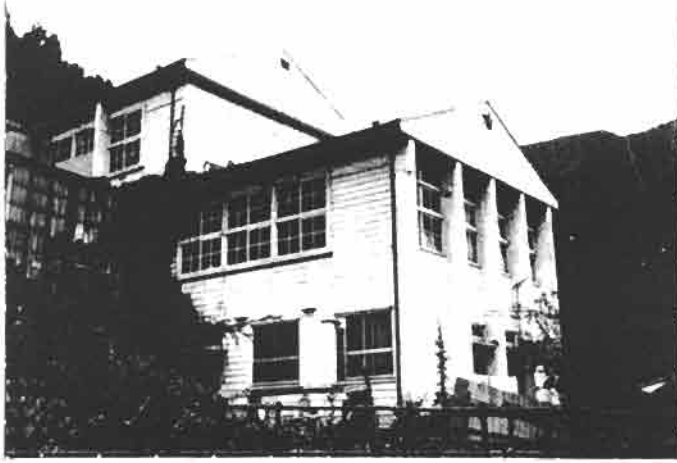
その頃は、ドッチボールや跳箱が盛んで、朝早く登校して、校庭にカバンを置いたまま、ドッチボールを夢中にならってやった。狭い校庭なので、すぐボールが石垣の下に落ちてしまふ。その度に、大井川鉄道の線路まで拾いに行かなければならず、その間、競技は中断したが、よくもあまらずに根気強くやったものだと思う。跳箱も一台で、段を高くしたり踏み板の距離をのはすのを競い合い、始業の時間も忘れて、先生にしかられたことも再々あった。放課後は、鉄砲や杉鉄砲を作って、川原や山の中を駆けめぐり、夕暗み迫るところまで遊んだこと、チャンバラに、うち興じたことなど、勉強のことより遊んだ記憶の方が先によみがえってくることは、優秀生ではなかった証拠かも知れない。

狭い校庭での運動会も、また、栗しみの一つだった。直線距離が短かく、すぐ、カーブになるので、競走というより、走り回るといふ感じだ。大きな五葉松の幹が、カーブのところにあつて、回ると手助けをしてくれた。片手を幹にあて、ぐるぐると回ると、状態は他の学校では見ることのできなものであった。如何に、うまく回るかが、勝敗の分かれ目で、みんなよく練習したものだ。べ



昭和14年頃の下泉小学校

写真提供 勝山静雄様



なつかしい新校舎 大井川鉄道下礼上より写す

「狭い中での競技ではあったが、誰れも不満を言うこともなく、楽しい一日を過ごしたものだ。」
 五年生になってから、よく全体責任という言葉を使われるようになった。出された宿題を、一人でも忘れてくると、全員が残りの宿題をしたり、校舎の掃除をしたりと、全体に影響してくるのだ。みんなに迷惑をかけるのではないと、夜、ねむい目をこすりながら、宿題に取り組んだ記憶が浮んでくる。丁度、戦時中も濃くなり、毎日の生活が、学校にもとり入れられた頃だった。
 卒業以来、四十八年経った。今は、町は町になり、道路も整備されて、町の様子も一変してきた。反面、過疎化の波も押し寄せ、時代の変遷をしみじみ感じた。このらも、育ぐくんぐくくれた母校の少女は、いつまでも忘れられない。



八十年代橋下手道路より下泉小学校及下泉地区を望む



写真上 校庭西台地の河野先生岩本先生の碑
 写真左 大正末期から昭和初期の下泉
 現運動場附近と思われる
 写真提供 高畑恵造 録

中川根町の未来に
愛と期待をこめて
山澤英夫

九月三日付朝日新聞に、夢のエンジンと言われた「スターリングエンジン」が、実用化への見通しがついたと一面トップに出ている。

このエンジンは、一八六一年に英人ロバート・スターリング氏が原理を發明したもので、従来の内燃機関の常識を打ち破り全く逆の外燃機関で、メカニズムは、シリンドー内に水素やヘリウムガスを密封し、外から加熱したり冷却することでピストンを動かす。燃焼効率が大きく排ガスも少ないというまさに夢のようなエンジンである。原理發明から一七〇余年を経て初めて日本のトヨタグループが実用化への開発に成功したというのである。従来のエンジンに対し、一八〇度の発熱の駆動で、私は今更ながらその人智の素晴らしさに唯々驚くばかりであった。

不可能を可能に、夢を現実のものにする。そんな無限の進歩と拓がりを実現する能力を人間は秘めている。

冒頭にこんな記事を引用したのは、外ならぬ我が御土中川根町の未来も、夢や希望を花子町民の英知と努力の結集があれば、必ず現状脱皮と発展への窓口が開かれようと思つて考へたからである。

廻縁とかへき地という言葉をよく耳にするが、私はこの言葉が嫌いである。それは、甘んじたく諦めのニュアンスや無力感の響きがあるからである。現に廻縁地とかへき地で暮らしていても、心も廻縁地へき地になるべきではないと思つた。

水と緑に恵まれ、三千年の太古から人々が営々と住み続けを母なる大地中川根は、素朴で、変化や発展の速度は鈍いかもしれないが、心身両面に与える健康度はその居住性は他に優るとも劣らぬ条件を具備していると思つた。戦後我が国の急速な科学技術の進歩を経済成長、こうした中で教育爆発と言われし程の進歩のあまり、そうした急激に変化する社会の動きに対応するに、多様な課題性が生じて来たことは事実であるが、なにかかわらず私はこの地に捨て難い多くの魅力を感じている。

今当町では、水と緑を生かした活力ある町づくりをしようとして、町当局をはじめ関係者の方々が鋭意努力されているが、我々町民もその意とすると、課題性をしっかりと認識し、それその場の場において主体的に取り組んでいけば、課題克服への道は必ず開かれようと思つた。

町民性化への課題は？と問われれば誰しもが、地場産業としての森林、茶葉の振興、職場の拡大と生活の安定、道令期の人々の結婚問題の解決等を取り上げるだろうと思われ。農林業の振興如何は町の経済に大きな影響を与え、活力源で事は極めて重大である。課題解決には私もには不

明の複合要素を内包しているもので何とも言えないが、流通、販路の根本的見直し、市場開拓とPR、用途多様化への研究開発等必ず振興への余地はあるのではないかと。職場の拡大も行動半径を大きくし、人口流出に歯止めをかけるには、東海グリーンベルト地帯への距離と時間の短縮が生産性を高めようとする。第一東名高速道路も藤北の北へ誘致する事は、脱後進性への千載一遇のチャンスといえるのではないだろうか。結婚問題も難しい実情があるが、若い人たちが少なくなり、生涯を通じた生活設計し、正しい結婚観を掲げてよりよい家庭を築いていけば必ず町に活力が生じてくるとは思っている。

第三者が、中川根の町をどう評しようとしても、私たちがこころを込めておこなっているのは、その発展を願わぬ者には居ない。我々町民一人ひとりが、居住性への課題を我がものとして受け止め、未来への夢や希望を根気強く花子続け、その打開に向けて創意と努力を重ねていけば、夢は必ず実現されるように、必ず大きな未来が開かれるのではないだろうか。



大井川の河原に今年もコスモスの花が咲きました。川の流れの少なさには心が痛みますが、ここ数年台風など洪水に見舞われることもなく、初夏には、川のあちこちに俗名はヒリソウのピンクのじゅうたんが見られ、夏の夕刻にはおまつよい草が黄色の花を開きます。しばし、大河への恐怖を忘れてしまう光景は「真実」なのではないか。

林業



林業といえは多くの人が木を切ることを最初に思いおこすだろう。今ではマスコミの話題に上ることは少ないが、たまに出ると、知床の伐採問題などがクローズアップされ、林業活動が即ち自然破壊を招くような印象を与えてしまっている。しかし林業というのは長い間、森林を守り育て、その結果として何十年、何百年に一度木材として収穫し、その利益の一部を再び木を植えたり、それを適正に育てるために使用し、長い時間とをかけて再び森を作っていくことなのである。森林が今日まで維持されてきたのは、そこに林業という産業に反えられてきた山村の人々の努力の結果だと思おう。林業という産業とそれを通じた収入の裏づけがあったればこそ、森林は維持管理されてきたのである。

ところが、木材不況や山村の人口流出、高齢化は、こうした山のサイクルに大きな影響を与え、林業関係者の山離れ現象が一層進んで、管理不足の山が目立ってきている。これは森林として山村の危機とも言える時期を向かえつつある。

こうした中で、木材に代わる材料の進出などで、木に対する需要は相対的に低下してきたが、その反面森林そのものに対する社会的期待が増大してきた。豊かな水の供給、国土保全、大気保全、レクリエーションの場など、公益的な機能の重要性が認識されだした。山村の住民や林業関係者にとって、こうした森林に対する理解や認識が深まる事はたいへんよい事ではあるが、あまりにも、その公益的文化的利用が優先し、表裏一体であるはずの生産部門が軽視される風潮、そして政策が多いように思われる。森林はその機能の多様性から、みんもの大切な財産で、それを維持管理していくことが、義務であることはちがいない。そしてその中心となるのは、山に住んで生活している人達である。山村で健全な林業の生産活動が行なわれて、初めてより豊かな、多面的な森林の恩恵を受けられるという視点に立って林業・山村問題を考えてほしいものです。



文沢・杉山喜英

落葉のゆくえ

年々、林床に積もる落葉や枯枝はたいへんな量ですが、どうして森は落葉で埋もれてしまわないのでしょうか。

森の中の落葉は表面にあるものは乾いて元の形をしていますが、めくってゆくと湿って柔らかくなった葉になり、それがしだいにポロポロに崩れ最後には土のようになっていきます。

なぜ土のように変化するのでしょう。落葉は小動物の住み家なのです。甲虫類の幼虫、ヤスデ、ミミズなど大きな動物もいますが、大多数は1mmくらいの小さい動物で、タニヤトビムシなどで、多いところでは1m²の落葉の下に何万もいるといえます。これらの虫やカビ、キノコ、細菌などによって落葉は分解されてゆき、土は肥え、木はさらに根を伸ばし、葉や枝を広げて大きくなるわけです。

又この様にして出来た腐葉土は、貯水機能にすぐれ、森林地帯は緑のダムといわれ、洪水防止、水資源として、大切な役割をはたしているのです。



山犬鉾附近のブナ林 葉が小さく木もれ日が明るい

我が青年団

中川根町青年団

「こんにちは」中川根町青年団です。我が中川根町青年団は五十名で現在活動していますが、今日は、中川根町青年団の活動と今の青年団について少し書かせてもらいます。

我が中川根町青年団の一年間の主な活動は、本年、第二回を迎えました。大井川清流祭、中川根町産業文化祭、青年団研修旅行、青年祭と、主に四つの大きな行事があります。

その他に、委員会活動があり、社会、体育、総務の三つでいろいろな活動しています。

◎社会委員会は、年二回四町（金谷、川根、本川根、中川根）で行われるG.C.（グリーン・グリーン）運動・G.C.花や木を育てる・C.C.あき広ひろい、をメインに色々な活動をしています。

◎体育委員会では、青年団のキャンプを中心に、年数回のレクリエーションを計画して活動しています。

◎総務委員会では、年五回青年講座を計画しています。

先日行われまゝ、県青年祭で、体育部門ではソフトボールが県大会に出場し、優勝というすばらしい成績をあげ、中川根町青年団の名を上げて来ました。文化部門では新聞部員が一年間かけて作り上げた機関紙、若い芽と大井川清流祭のポスターを出品しました。おしくも入選とのがし、残念でした。

六十二年度の青年団活動も半分がすぎました。今後、産業文化祭、研修旅行、青年祭とあります。団員一丸となり今後の活動に力を入れ、もっともっと活気ある地域になるよう、若い力で、サードも協力できるような活動をしていきたいと思っています。

何も出来なかつた団員一人一人が、青年団活動と、おいて、人の上に立つむすのか、又、皆で協力すれば大きな力になると、いう事を、何らの形でも身につけてくれたことをうれしく思います。

団長 山本敏明（三津間地区）



あの時"のようすは！

中川根は

★大掃除中の出来事。ゴーと山鳴りがして家が揺れはじめた。二階に、赤ちゃんと病人がいたので階段を登ろうとしたが、なかなか登れない。やつの事で登ったところ、二階の方が大きく揺れていた。立っていられなくなるとはう様に、二人をつれて外に出た時は、地震が収まっていた。

★午後だったと思われる。家が大きくゆすられたので、ゆすいにすり鉢をかぶせて、大黒柱にしがみついていた。大黒柱が二回、三回、とこぼれては、元にもどった。

★地震だーと外へとびだして見ると、足がもつれるようになつて進まなかつた。柿の木が同じ方向に、何回もペターと倒れては起きあがっていた。ゆれるたびにペターと倒れる様子にはおどろいたが、終わったあとは木はもとどおりになっていた。何分位続いたかは、わからないが、中津川に電力水路工事の人達が、沢山いたが、大声をあげて山へにげて行く様子かわかつた。

その後一ヶ月以上予震が続き、そとへ、とび出すこともあり、空襲警報もあり、不安な夜が続いた。

★午後二時から三時ごろだと思ふが、大井川の上長尾前で、石ひらい作業の休み時間だった。六人ほどで川原に寝ころんで休んでいた。風もなく静かだった。突然、みはらしの、もうどう竹が大きく揺れはじめた。地震だ。といって、あたりを見るとき、もうどう竹の様子がおかしい。ざわざわ音をたてて、地面までしなり、また起きあがる動作をくり返した。

大井川には、かなりの水があったが、その状態が異常だった。田野口の方から横がわれの方まで、同じ動作で水面が一爪位はね上り、水しぶきを立てている。流れにもさからい右岸左岸に、ピチャー、ピチャー、と水をまきちらしている。言葉では表現しにくい、川の様子、異状さ、竹やぶの動きのすさまじさは、今もわすれる事ができない。今考えてみると、あの揺れ方は、横揺れだったと思う。

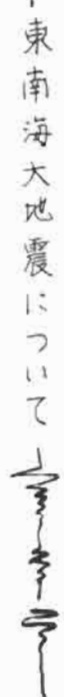
1944年
昭和19年

東南海地震特集

12月7日
午後

昭和五十年に、東海大地震説が唱えられ、早、十数年がすぎました。周期的にくり返されているという大地震、土地開発、都市部人口集中、火災、津波など、予想もつかない被害となろう東海大地震「明日起きても不思議でない」と言われながらも、今迄無事である事か、「その時」への準備が十年前ほど努力されてはいない様にも思われます。東海大地震は科学的に予知される事の事ですが、少し規模の小さい地震は予知網をかいくぐり、突発的に発生するかも知れません。

昭和四十年代に、富士の宮附近の地震、南伊豆石廊崎沖地震、最近に長野県王滝村附近の地震が記憶に新しいのです。中川根はあまり揺れませんでした。しかし、昭和十九年の東南海地震は、中川根もかなりの震度だったようです。戦時下と言う事で、各地の被害など全く報道されなかったの事ですが、様々な場所で体験した皆さんに、東南海地震の記憶の糸をたぐっていただきました。



東南海大地震について

M7.4 震源地熊野灘 有感半径六八〇km 御前崎付近隆起、沿岸各地に津波、東海道線で列車転覆十三件など被害大、御前崎震度も烈震、富士、興津、浜松など震度5強震、熱海、網代、御殿場、沼津、下田、静岡など震度4中震、(中川根震度?) 死者一四三人、倒壊家屋六、二三〇戸

袋井周辺の惨状 袋井町では、旧東海道沿いの人家はほとんど全壊し、その数五七五戸、保育園や小学校、校舎が倒壊し、園児、保育児童が下敷きとなり死亡。現袋井市の一部で当時三十戸ほどあった地区が、千八百余戸が全壊、余震もひどく、中でも十二月十三日に大きな余震があり、数日間、仮小屋などで生活した。

静岡県 諏訪の昭和史より

近年まで、この地震は東南海地震といわれず、袋井地震といわれてきた。又、長野県諏訪湖一帯も震源地とはなれていても、大きく揺れたとの事です。

★ 中徳橋(つり橋)を渡っていたら、突然橋がジャンジャンと大きな音をたてた。つり橋は何人か一度に渡ると揺れる「ジャンパー」音がする。前には人影も無い風もない。後ろから何十人もの人が自分の方へ、かけて来る様子が気かして、橋を渡った。渡り終ってふり返って見ると、少しいなかつた。歩いて人に逢ったら、「今、恐ろしい地震だった。あ」と言われてはじめて地震とわかった。大きな橋の音だった。

藤枝の葉梨で

匿名女子青年団でみかん取りの勤労奉仕でみかん取り作業中の出来事、一人、木に登って収穫していたが、突然「目まがした」と思ったら地震という。地面につきやうに木がゆれて、やっこの思いついて地におりた。今思えば、恐ろしい体験だった。みかんは山の上の斜面にあり、眼下に、小学校があった。見ると運動場が蛇の様にうねっていて、教室からとびおくれた子供達が、よろよろ、蛇のくが見えた。横揺れだったと記憶している。

清水で

二階に居たので、大きく揺れた。階段がななかに降りられず、たいへんだった。外へ出た。外から家を見ると、屋根と壁の隙間が、大きく開いたり、ちぎんだりをくり返している。同じ方向に揺れないのが不思議だった。この近くは倒れた家もなかったが、次郎長通りの方は、ひどかった。

牧の原で

航空隊にいて地震を受けた。翌日掛川方面に救援に行ったり、大へんな惨事となっていた。家は同方向に傾斜たおしに倒れていたり、けが人、家畜も死んでいた。地割れも方々に見られた。

東南海大地震の記憶は五十才以上の方に、お聞きしました。村には出征中の男性が多く、老人、婦人、子供で、大地震を体験したわけです。大きな地震と言う事は皆さん一致しました。ここ、中川根で家が倒れたとの、火事になったという事は、誰もおっしゃいませんでした。

中川根町成人学級より

昭和恐慌と中川根の経済更生計画

講師 山本義彦先生（静岡大学教授）

昭和恐慌はアメリカ向け生糸輸出の崩壊と直結する形で描かれてきた。資源の乏しい日本で養蚕は国内で原料生産できる数少ない産業であった。昭和四、五年の世界恐慌でアメリカの経済力は六十年も逆もどりしたと言われる。不況の風は世界中を吹き日本も例外ではなかった。（ロシアのみが世界恐慌外であったという）貿易国日本は、それまで生糸輸出が順調に行なわれ、最大相手国アメリカより経済力はまさっていたが、生糸輸出の赤字で立場は逆転した。都市では倒産、紡績工場、重工業の工員の手切りで失業者があふれた。全国的規模で公務員の給料は引き下げられた。東北地方では身売りが続き、昭和十二年（日華事変）頃まで農山村では不況が続いた。

経済更生運動とは、当時の農林大臣 後藤文夫名にて、農山村の経済の建て直しを図るべく「経営状態を改善し、産業組合をつくり、生産販売を統制し、金融を改善するなどの計画的組織改善を図る」これを推進する地域の「中心人物」を育成する。自主・自立の村おこし運動のリーダーを育てること、それに加えて学校、青年組織等に、二宮尊徳の「報徳思想」を教えた。この「中心人物」は戦後の農地改革のリーダーとなった人物もいる。

「中心人物」が決まったら、町村の経済計画をたてさせた。又隣保共助けの精神や、農村の家々に家計簿（日記）をつける事をすすめ、人々の意識の向上、計画化を図った。意識を変えることは、借金におかれている地域より、多少なりとも余裕のある地域の方が実行できるものである。施策によって、全国で二割くういの家で家計簿をつけるようになった。農村で二割の人の中には、地主、自作農が多かったと言ふ。この人々が国を変える力になった。（国家が一方的に決め指導する事はいつの時代も後追い型になるが、人々の考えを汲み入れるように変わった）経済更生運動（計画）が成功か失敗かを問うのはナンセンスであるが、地域リーダーを育て、実行過程で自主・自立の精神を二割の人々にもった。という事は成果であり、各地で農民運動、青年運動が起こり、その生産的エネルギーを「満州農業移民計画」にむけていったのである。

経済更生計画と特別助成金。昭和二十一年（一九四六）より経済更生計画が着実に推進している町村に一定の助成金を（共同倉庫・索道など）を交付することになった。といくも施設への助成は五分の一ほどで、各農家経営改善や町村自治員助成などに使われたという。この計画に後から加えられたのが「満州農業移民」分村計画だった。つまり特別助成金 + 満州農業移民の型で助成されていった。この特別助成村数は全画で、五九五町村、群馬県は三八八町村あり、この満州分村計画が組まれたのは五町村にとどまっている。

満州農業移民については農林省が推進したくないのが実状であったという。軍部 + 関東軍の力の強さのしと、基本的に農村の建て直しとは異なる為、経済更生運動の隠微共助の精神を活用、満州に對する不安を地域ぐるみ家族単位の分利という事で推進していった。軍部の考えは満州平定には軍隊のほかは武装農民が必要であった。移民は町村三百戸単位（家族五人）で二十一年後には満州人口、五千人人中一割の五百万人を日本人としたいという事で進められた。満州移民に積極的だった地域に長野県があげられるが、長野県は養蚕むすしの県であったが由、養蚕農家の没落により、五族協和王道梁土をもとめ、いち早く満州移民と選択したという。

現中川根町は当時、旧中川根村と旧徳山村に分かれていたが経済更生計画の晩期特別助成村設置政策の実行過程で大きな違いがあった。

※旧徳山村は特別助成を受けながら満州移民を進められた。旧中川根村は特別助成されなかったのに満州分村移民を行った。

① 県内の満州移民村は数少なく特別助成を受け満州移民を行った。村は富土郡富土日本、芝富洪和郡知波田段東郡愛鷹の五ヶ村であった。

何故このようになったのか？

山本先生「経済更生運動と満州移民」書に

むすびー昭和恐慌中川根地域の一面よりー一部転載

経済更生運動が展開をみた昭和恐慌期から戦時期の大井川中流域の隣りあった二つの山村で

一方は更生運動から「特別助成」指定村に展開した徳山村と他方、更生運動から「満州」分村移民に直結した中川根村の二つのケースの相異をどう捉えるかについて。

まず両村の構造的差異性、ともに林業を中核とするとはいえず、中川根村は徳山村に比べて、それへの傾斜度が高いばかりか、無一物の村民の比重も圧倒的だったのである。徳山村は多少とも製茶を含め農業基盤を持ち得たこと、昭和恐慌に際しても村民負債の程度が中川根より軽いものであった。このことは恐慌前後の変化にも表われ、税額ラウの変動をみると、徳山村は有意の変化を認め難いが、中川根村は没落への傾向をより強めたことがわかる。

人々の経済的基盤の相異は、山村労働者となる比重の高い中川根とより軽い徳山との差に現われたばかりか、産業組合支配力にも差を生じ徳山より中川根がはるかに低い。かくして更生運動にさいしても、農家副業を含め生産力増強に力を傾けることのできた勝山村長と、教師丸山正作の活動の余地を与え得た。したがって勝山は農村振興にあり、満州への農民送出による方策には、基本的に応ずることなく対処した。むしろ彼の、報徳思想をもって更生運動を行おうとする立場が生産力としての農民を外部に送出すこととなく活のすこと、かれらの自主自立をうながしたといえるが、この発想を可能とする一定の土地がなければ、それも画力だったろう。しかも「特別助成」にすめられたのはどうしてか、農政当局には「特別助成」が一定の発展可能性ある村々に綱をかけるという姿勢があった。その点から徳山村は一定程度合致していた。しかしこの「特別助成」の後半は分村移民政策との運動がうたわれた。それをあえてとらなかつたのはどうしてか、まず勝山平四郎が県立農学校時代、竹山拓太郎と同期の親友であり、竹山が静岡に帰る時、勝山の家泊まることを習慣とするほどの間柄であった。そこで竹山が徳山の窮状克服に力を注いでいた勝山に更生運動の指定村を受けようアドバイスした。このことは特別助成にも有利だった人的条件である。加えて、分村移民に反対の勝山の立場を竹山は理解したといえる。しかし、勝山は移民一般を否定したのではなく、三〇〇名といったオーダーでの移民では、残った人々の農村経営が困難にしても、一九三三年に五世帯二〇名のブラジル移民には、推進役を果たしている。

しかし、中川根村にとって浮揚する条件をいかに持ち得ないままに恐慌期をくぐり抜けた中からポツカリ口をあけていたのは、分村移民の「光明」だったに違いない。林業経営に労働力提供の形で依存するしかあつた中川根村にとって逃げ場がなかった。その逃げ場も当局者が予定する分村移民志願者がぞくぞく出現するようならならなかった。

「不幸の選択」とはまさに、このことである。

以上のこととの対比で思い浮かぶのは長野県浦里村の事例であろう。養蚕一すじの生産機構をもった同村にとって、二〇年代の上向的發展の下で登場してきた農民運動が、ワシム弾圧の下で崩される中で、運動指導者がその身につけた組織活動量をひたして更生計画推進に転生し、同時に更生すべき養蚕業に未来を見出し出い得ないがために、分村計画に走ったのである。中川根村の場合、さうしたブルジョア的発展への可能性をもちえぬばかりか、戦後(日露戦争)頃恐慌にひきつづく地域経済の衰退を経験しながら、昭和恐慌に決定的に奔弄され、農民闘争を知ることなく分村移民に直行したのである。モノカルチャー(たゞ一つの事を主とする)ではあれ、多数の農民が養蚕業に生産的にかかわった(経営者)浦里村は、その村人たちのエネルギーを移民に結びつけた。しかし、一物の、未来への見通しをいささかも持ち得ぬまま生かされはならなかつた中川根村の人々は、さしあたりエネルギーを「送養」される概念もなかつたし、さうできぬ状況が、全階層からの分村移民を形成しえない根拠となつたのであろう。〔敬称略〕

〔余録〕

中川根町成人学級が農閑期の夜を利用して開かれております。すでに二回を終了し、残り二回となりす。その中で、今回載せました昭和恐慌と中川根の経済更生計画は特別助成になりまく。山本先生は、県史編集委員もなつておられ、資料の豊富で中川根町へは、度々いろいろおられます。文面記載重複に付、まゝしてはご容赦願います。



中川根村 満州分村移民 記念碑
拓 魂

中川根中学校庭横に、静かに建て、庭木に囲まれて、忠霊塔、旧中川根、旧勝山内村の忠魂碑もおかれています。

中川根中 運動会より



長なわとび
何回とんたて
シヨカ

中川運動場にピラミッド建立



応援合戦



才一回
村民体育祭



昭和三十四年才一回村民体育祭
優勝は梅高区
中川グラウンドにて

「や・た・ら・に・い・と・り」追放

天高く馬こゆる秋、御用心

食生活でいちばん気をつけなければいけないのが肥満。肥満は糖尿病や動脈硬化、高血圧など成人病の元凶ともいえます。そこで栄養士さんの団体がすすめる「肥満防止のための7箇条」をこ紹介しよう。

- ① …… 夜食はやめる
- ② …… 多食はダメ
- ③ …… 楽をして動かないのもいけない
- ④ …… 2回食(朝食抜き)は太る
- ⑤ …… フラストレーション(ストレス)は過食のもと
- ⑥ …… 糖質のとりすぎは禁物
- ⑦ …… 両親が肥満だと子供は太りやすい。

—町保健衛生だより—

季節もよいし足をきたえようね。

—ふる里の山へハイキング、いいよ—



中川根中 中野貴久乃さん (中三 女子)

走り高跳 記録—メートル六十二 郡大会記録更新

中川根中学校は郡、上競技大会で総合四位の成績をおさめ、自己記録挑戦と母夜の名譽をかけて一位五種目、二位六種目とめざましい活躍をみせました。なかでも走り高跳の中野貴久乃さんは郡最高記録を樹立させました。中野さんは長身の体と豊かなジャンプを生かし、他の大会でもメートル五十九、六十は毎回クリアーします。将来がたのしみですね。主な大会の記録は

- 七月二十六日 通信陸上県大会 三位 一・五八 (草津)
- 八月二日 島田陸上大会 一位 一・六〇
- 八月十二日 東海中学陸上大会 三位 一・五五 (名古屋)
- 八月二十二日 全国中学陸上選手権大会(決勝進出) 十位 一・五八 (三重県)

伝説

河童徳利 カッパドックリ

昔、相模の国の茅ヶ崎という所に、ここの家の当主、五郎兵衛がおりました。

ある日、間門川にて馬を洗っておりまして、ちょうどその時河童が現れ、五郎兵衛の馬の尻に喰いつきました。馬と河童が騒いでいる中を、若者達が駆けつけ、河童を捕らえて大木にしばりつけました。が、五郎兵衛は大変情け深い人で、したので河童を放してやりました。

その夜、河童は五郎兵衛の家を訪れ、「私の命を助けてくれたお礼です。」と言って、限り無く美酒がでる徳利を五郎兵衛に差し出した。そして「その徳利の底までたたくと美酒は枯れてしまいます。」と河童は申し添えて行ってしまいました。

その後、五郎兵衛は日夜、この美酒を飲みもせず飲み続けたため、田畑は荒れ放題となりました。

月日が流れ、五郎兵衛はようやく自分の愚かさに気が付き、自らの手で徳利の底をたたき、二度と美酒を飲めなくしてしまいました。

その後、五郎兵衛は再び家業を興し、文政七年一月、一生を終わりました。

河童徳利の伝説は元々中川根町のものではありませんが、文中五郎兵衛さんの子孫の方が中川根町に転居なさった折、家財道具と一緒にこの徳利を持参されたことにより、石碑は智満寺にあります。



五郎兵衛の馬の尻にかっぱがかみついた。

四季の里より

「お歳暮パック受付中」

ことしも四季の里よりふる里の味と香りをお届けします。

中川根特産品販売所「四季の里」では、おかげをもちまして、開店以来一年を過ぎ「都合の方」又「中川根を受する皆様」に喜ぶはれ、毎日店内にもぎわっており、感謝しております。
ふる里通信が皆様のお手元に届く頃には、山はしみじみ、店内には栗柿、さつまいもなどが、所せまーと並らばれている事と思われ、また、さて「四季の里」では、ことしも「お歳暮用品」を準備しております。お世話になった方に、お友達に「ふる里の味」を贈ってあげて下さい。

1 セット
¥ 3,000.- 送料込
申し込み切 11月30日.
発送切 12月20日.
内容

手打そば 1P 300g
よむぎパン
いもがら
芋切 干柿
干椎 茸 その他

申し込み方法 ①電話で (9:00~15:00)
05475 (6) 0542
②葉書で

428-03

榛原郡中川根町梅島下、四季の里宛

四季の里
は木曜日が
お休みです

定期購読のお願い

「中川根ふる里通信」は有料発行です。
一部 年共 100円

皆様の定期購読申し込みがこの通信の発行を支えます。

年間4回(季刊誌)の発行を予定しておりますので、年間予約400円をおすすめします。

すでに期間が切れている方と、今回で満期になる方に郵便振替用紙をお送りします。

引き続きご購読いただきたいと思っております。

申し込み先 〒428-03

榛原郡中川根町上長尾990

中川根町役場 総務課

ふる里通信係

郵便振替口座 <名古屋>

7-81556

編集室より

ここ数年台風も襲来せずふる里は実りの秋をむかえています。栗や柿など秋を感じさせる植物は多いのですが、山々が赤や黄色に色づく事を、いまの子供達は見ることがありません。それほどふる里の山は、針葉樹林に変わっているのです。山の価値は倍増し豊かなる里になっても、そこに住んでいる時、秋になると美しい紅葉を見に行きたくなり、さあ出かけよう、まだ自然の残っている大礼山を面へ、ササヒを伴はして、奥大井の谷へ、自然は明日への希望を手とく、ねらうか、よう。



さるとりいはら

購読者の皆様、お便りお待ちしております。

投稿 希望 急見 一お住みの地のお話、何でも結構です。
2008年1月発行予定
印刷 徳山、川根印刷所

幻の「東南海地震」絵本に

市川さんが絵本で描いた救助活動の様子



当時袋井の8歳・市川さん、自費出版

太平洋戦争末期の1944年12月、静岡、愛知、三重の3県を中心とする東南海地震が起こった。袋井町（現・袋井市）において8歳だった市川和子さん（73）＝東京都西東京市在住＝は、倒壊する学校の校舎から間一髪で逃げ出した。軍の圧力で大人たちは被害について語らず、新聞の報道も小さかった。悲惨な体験を今に伝えようと、市川さんが当時の様子をまとめた絵本「東南海地震 八歳の記憶」を自費出版した。

（相関真樹子）



市川和子さん

市川さんは当時、袋井町西国民学校3年女組に通っていた。

五時間目、習字の授業中でした。突然教室が揺れ、壁土や尖ったガラスが落ちてきて大騒ぎになりました（絵本から、ゴシック部分は以下同じ）

授業中教室が揺れ、尖ったガラスが落ちてきて

ながら歩いて、やっと外へ出た直後、校舎のうち2棟が、まるで屋根が地面に沈むかのように倒壊した。数秒が生と死を分けたのです

市川さんの父親らが駆けつけ、倒れた校舎の屋根に上って瓦をめくり、梁を切つて下敷きになった子どもたちを助け出した。校庭にムシロが敷かれ、救出された児童が寝かされた。

布団も毛布も無く、遠州の空っ風の吹く中、むき出しの怪我から血が流れています。眼のやり場の無い程の痛ましい親子の確認もあります

太平洋戦争中、日本では3度大きな地震が起きた。43年9月10日の鳥取地震では1083人が死亡。44年12月7日の東南海地震は死者・行方不明者1223人。その37日後の45年1月13日には三河地震が発生し、2306人の死者・行方不明者を出した。

戦局が悪化した時期に起こった東南海、三河の両地震については、軍部が厳しい報道管制を敷いたため記録が少なく、「幻の地震」と言われている。

東南海地震を伝えた当時の朝日新聞も戦争一色だった。地震の翌日は日米開戦3年の「大詔奉戴日」。1面には正装した昭和天皇の全身の写真と「『一億特攻』大東亜戦争第四年へ」という5段見出しが躍る。

地震については3面で「昨日の地震 震源地は遠州灘」と2段の見出しで掲載。「意外な強震だったが一部に倒半壊の建物と死傷者を出したのみで大した被害もなく郷土防衛に挺身（ていしん）する必勝魂（ひっしょうこん）ははからずもここに遅（たぐま）しい空襲と戦う片鱗（へんりん）を示し復旧に凱歌（がいが）を上げた」などとし、死傷者数や被害の様子を正確に伝えていない。

44年12月7日発生 死者・行方不明1223人

軍の圧力で語り継ぐ活動続け

学校では、現在の東京都大田区にあった桃谷国民学校からの疎開児童2人を含む20人が犠牲になった。市川さんの自宅は全壊。夜は、近所の倉庫で寝かせてもらうことになった。大小の余震が頻りに襲ってきます。空襲警報のサイレンがけたたましく鳴りました。私は屋根が怖くて眠らないで出入り口に座っていました。記憶では、この地震を境に空襲が厳しくなったという。市川さんは15年前、東南海地震の体験文集に寄稿したのをきっかけに、経験を語り継ぐ活動を始めた。「亡くなった20人の無念さが私の背中を押している」。絵本は200部刷り、袋井市などに寄贈した。